

罪過

紫 李鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

岩城聡は、強盗殺人の容疑で追っていた内藤忠嗣の実家がある熱海にやって来た。

目次

3	2	1
9	5	1

岩城聡は、強盗殺人の容疑で内藤忠嗣を追っていた。忠嗣には傷害事件の前歴があり、犯行現場に残されていた指紋から特定するのは容易だった。

当時の現住所になっていた熱海の実家にやって来た岩城は、表札の〈内藤〉を確認すると、塩害で錆び付いたような木造の二階建ての玄関チャイムを押しした。出てきたのはその古い佇まいに不釣り合いの派手な顔立ちの女だった。

「どなた？」

訝しげな目を向けた。

「……内藤忠嗣さんの実家でしょうか」

岩城は警察手帳を女の視線に合わせた。

「ええ、そうですが」

四十前後だろうか、女は赤い唇をすぼめた。

「失礼ですが、内藤忠嗣さんとの関係は？」

「俗に言う、継母です」

薄ら笑いを浮かべた。

「……息子さんはいらっしやいますか」

「忠嗣は高校を卒業してすぐに家を出ました。電話はたまにあります
が、電話番号も住所も教えてくれなくて。忠嗣が何か？」

「……殺人の容疑です」

「えっ！ 殺人？」

女はアイラインとマスカラで輪郭を整えた目を見開いた。

「中へどうぞ」

玄関先で話すような類いではないと判断したのか、女は急いで家に入れた。客間らしき六畳間に通すと、押し入れから座布団を出した。

「どう言うことでしょうか？」

女は岩城と座卓を挟んだ。

「新聞は読んでませんか」

「ええ。主人が亡くなってから購読は止めました。それに、この数日忙がしくてテレビのニュースを見る時間もなくて。……で、殺人て？」

「おととい昨日の未明、新宿のアパートで女子大生の遺体が発見されたんです。ドアノブに付着していた指紋から、息子さんが関わっていると断定し、こうやって来た訳です」

概要を語った岩城は、一息ついた感で背広のポケットから煙草たばこを出した。

「……だからと言って忠嗣が真犯人とは限りませんよね」

女は征服したような表情を向けた。

「えっ?」

岩城はライターを持った手を下ろした。

「だって、そうじゃありませんか。その女子大生と付き合っていたかもしれないし、じゃないとしても、強盗に入ったのは忠嗣かもしれないけど、殺しは別の人間という可能性もありますよね」

女の言うことは理に適っていた。

「……」

「指紋の一致と前歴だけで忠嗣を真犯人にするには早計ではないですか? それに、中学の時に同級生と喧嘩して、相手に怪我をさせてますが、相手も非を認めて示談で解決しています。それなのに、真犯人扱いですか?」

逆に取り調べられているようで、岩城は顔を上げられなかった。

「……ですから、あくまでも重要参考人としてー」

「あら、さつきは容疑者だと仰おっしゃってましたよ」

「……」

「とにかく、慎重に捜査してください。乱暴されたのなら精液検査や、その女子大生の交友関係も徹底的に調べてください。すみませんけど、これから仕事なんで」

それは、〃早く帰れ〃を婉曲えんきよくに言っていた。岩城は急いで陶器の灰皿に煙草を揉み消すと腰を上げた。

「あ、お名前を」

思い付いたように発した。

「……あずき。内藤梓です」

そう答えた梓の眼は敵意に満ちていた。

梓に関心を持った岩城は、物陰に隠れると出てくるのを待った。暫くすると、粋に着こなした柿渋色の和服で出てきた。岩城は適度の間隔を空けると、薄暮に浮き上がった白い足袋を印象付けながら緩い坂を上る梓を尾けた。

芸者か？ ホステスか？ そんなことを考えていると、海沿いにある一軒の引き戸を開けた。

「おはようございます」

梓の声が聞こえた。苔色の暖簾には、へ小料理 千鳥とあつた。暖簾の隙間から覗くと、板前らしき中年の男が晒し場で手を動かしていた。

……小料理屋で働いているのか。情報を得ると熱海を後にした。——新幹線の中で、梓の言ったことをメモしている時だった。岩城はあつと思つた。

……待てよ。強盗の件も、暴行の件も梓には言っていない。なのにどうして知ってたんだ？ つまり、新聞なりテレビのニュースなりで事件を知っていたことになる。いや、忠嗣本人の口から聞いた可能性もある。……梓という女、油断できないな。岩城はそう思いながら、駅の構内で買ったへ天城峠の釜飯の蓋を開けた。——

岩城は署に戻ると、「現場百遍」を試みた。というのも、梓の言葉が引つ掛かっていた。

- ・ 忠嗣が被害者の交際相手だった可能性。
- ・ 財布を盗んだだけで、殺害はしていない。
- ・ 独り合点で忠嗣を犯人だと断定した。

確かに、指紋から前歴のある忠嗣を犯人だと決めつけていた。仮に真犯人が別にいるとしたら……。岩城は被害者の交友関係を洗い直した。すると、その中の一人に当日のアリバイがない男が出現した。

その男は被害者と頻繁に会っているのを目撃されていた。

取り調べた結果、簡単に犯行を認めた。動機は別れ話のもつれで、言い争っているうちにカーツとなって首を絞めてしまった。行きずりの犯行に見せかけるためにバッグから財布を盗んだとのことだった。

真犯人を挙げた岩城はほっとした。まかり間違つて忠嗣を逮捕していたら冤罪事件えんざいになるところだった。岩城は胸を撫で下ろすと、苦言を呈してそれを阻止してくれた梓に感謝をした。すると突然、梓に会いたくなった。

岩城は新幹線の中で、事件の経緯を整理していた。

死体検案書には、「死因は扼殺やくさつによる窒息だが、扼痕やくこんが二箇所にあるため一度息を吹き返し、その後にもう一度首を絞められた。それにより死亡に至った可能性がある」とあった。その件について逮捕した二十四歳の会社員、山田将希やまだまさきに問い質ただすと、「頭がパニックについて、何度首を絞めたか覚えていません」と答えた。それが当然だろう。理性を失っている状態で自分の一挙一動を覚えている方が不自然だ。そう納得すると、仄ほのかな恋慕を抱く梓に思いを馳せた。四十を過ぎた岩城は離婚歴がある独身者だった。一人の男として興味のある女に恋愛感情を抱くのは自然なことだ。――

それは、車窓を流れる暮れなずむ空を眺めている時だった。岩城はハツとした。山田将希を逮捕した気の緩みで肝心なことを忘れていた。……ドアノブに付着していた忠嗣の指紋だ。どうして忠嗣の指紋が付いていたんだ……？ 被害者と関わりがあるのか？ そんな疑問を抱きながらも、山田将希本人が殺しを自供したんだ、今更ほじくり返す必要もない。強盗に入ろうとした時にでも付けたのだろう。と誤認逮捕を払拭するかのように岩城はそう結論付けた。

〈小料理 千鳥〉の暖簾から中を覗くと、割烹着の梓と板前が晒し場で手を動かしていた。引き戸を開けると、二人の視線が同時に向いた。

「いらっしやいませー」

同年代に見える板前が愛想よく迎えた。だが、梓は対照的に無愛想な顔を向けていた。

「まだ、何か？」

傍そばに来ると、小声で訊いた。

「いいえ。今日は客として来ました」

「そうでしたか。それは失礼しました。さあ、どうぞ」

一変して笑顔になると、奥のテーブルに案内した。板前を一瞥すると、歓迎する表情でお辞儀をしていた。岩城はそれに応えるように会釈をして席に着いた。

「お飲み物は？」

梓はおしぼりを渡すと、お品書きを開いた。

「ビールにするかな」

背広のポケットから煙草を出すと顔を上げた。

「かしこまりました」

梓は一礼すると離れた。

時間が早いせいか、客は他にいなかったが、趣のある落ち着いた店だった。

「さあ、どうぞ」

割烹着を脱いできた梓は、暖簾の色と似た苔色の着物を着ていた。梓が注いでくれたビールを一気に飲み干した。

「まあ、美味しそう」

梓がクスツと笑った。

「美味しいですよ、事件も解決して。ご存じでしたか？」

「はい。ニュースで」

「この度はご迷惑をおかけしました」

頭を下げた。

「いいえ。それが刑事さんのお仕事でしょうから」

「ありがとうございます。そう言ってもらえると助かります。それで、今回のお詫びに食事を^{ちそう}ご馳走したいんですが」

「えっ、今日ですか？」

少し驚いた顔をした。

「いいえ。いつでも構いません。時間がある時に電話をください。これ、電話番号です」

岩城は、名前と電話番号を書いた紙切れをポケットから出した。梓はそれを受け取ると、

「……お電話します」

と柔らかい笑みを浮かべた。

「待ってます」

岩城は期待を込めた表情を向けた。間もなくして客が来た。刺身盛りや金目鯛の煮付けなど海の幸を堪能すると、忙しくなった店を切り盛りしている梓に言葉もかけられないままに店を出た。岩城は梓に未練を残しながら新幹線に乗った。――

だが、一週間経っても二週間経っても梓からの電話はなかった。業を煮やした岩城は熱海に向かった。電話一本で事は済む。だが、その電話で真相を知るのが怖かった。何か得体の知れないものが蠢うごめいているようで。――新幹線の中で、岩城はへ小料理 千鳥での梓との会話を振り返ってみた。電話をくれるように言った時も嫌がる様子ではなかった。だから、嫌われているということはないはずだ。だったらなぜ、電話を寄越さない。岩城は子供のように腹を立てていた。

熱海に着くと、一刻も早く梓に会いたかった岩城はタクシーを拾った。ところが、窓に明かりはなく、表札もなかった。焦る気持ちから何度もチャイムを押した。だが、家の中からチャイム音が聞こえるだけで、応答はなかった。夕闇と同化したその古い佇まいはまるで廃墟のように物悲しかった。不吉な予感がした岩城はへ小料理 千鳥に急いだ。暖簾越しに見ると、板前の姿しかなかった。

「梓さんは？」

戸を開けるなり訊いた。

「あ、先日はどうも。梓さんは辞めましたよ」

板前はあつけらかんと答えた。

「辞めたって、いつ？」

岩城は早口でまくし立てた。

「先月です」

「突然ですか？」

「いいえ。ひと月前から決まってきました。きちんとした人だから」

「で、どこにいるんですか？」

「さあ、そこまでは……」

板前は首を傾げた。本当に知らないようだ。もしかして梓と付き合っているのではないかと邪推したが、見当違いだった。これ以上の情報は得られないと察した岩城は店を出た。

どういうことだ？ なぜ、店を辞める必要がある。なぜ、家を引き払う必要がある。犯人は逮捕されているんだ、二度と忠嗣に嫌疑がかかることはない。なのにどうして姿をくらましたんだ。梓の突然の失踪がどうしても理解できなかった。

……まさか、誤認逮捕なのか？ 真犯人は忠嗣？ それで、そのことを知っていた梓が逃げたのか？ 犯人隠避ほんにんいんぴを暴かれる前に……。そんなふうに考えて急に不安になった岩城は、深いため息をつくとき、足を引きずって駅に向かった。――

岩城は車窓を流れる街の灯を追いながら、自責の念に苛まれた。
……梓に現を抜かし、冷静な判断ができなかった。それに比べて梓は、たぶん最初から自分が書いた台本があったのだろうが、一度として馬脚を露すことはなかった。つまり、梓の方が役者が一枚上だったと言うことか。まんまと騙されるなんて、俺の「刑事の勘」も錆び付いたな。……そろそろ潮時かな。岩城は辞職を考えた。――

別府温泉は秋色に染まっていた。紅葉を眺めながらの露天風呂はまた格別だ。他にも、別府温泉内に点在する自然湧出の源泉を巡る「地獄めぐり」。地獄の名にふさわしい奇観を呈する七つの源泉は、コバルトブルーの泉色の「海地獄」や真っ赤な「血の池地獄」、温泉熱を利用してワニを飼育する「鬼山地獄」、日帰り入浴が楽しめる「鬼石の湯」などさまざまな特徴がある。休憩スポットでは、地獄ゆで卵や地獄蒸しプリンが名物。

その一軒の旅館に梓の姿があった。

「内藤さん、左から順番にね」

仲居頭が指導していた。

「はいっ！」

梓は元気よく返事をすると、お膳を並べた。

「内藤さんな覚えが早えわ。初めちたあ思えん」

仲居頭が感心した。

「ありがとうございます」

「わしん右腕ん有力候補やけん、頑張っちくりい」

「はい、頑張ります」

梓は満面の笑みで返事をした。

仕事が終わるのは夜九時。梓はジーパンに着替えると、旅館の近くにあるウィークリーマンションまで歩いて帰る。

「ただいま」

部屋に入ると、ナポリタンの匂いがした。梓の好物だった。

「お帰り」

ピンクのエプロンをした若い男が、フライパンを動かしながら顔を向けた。

「美味しそう。お腹空いた」

洗面台で手を洗って椅子に座ると、ソフトウェアのミディアムをシユシユで結んだ。

「はい、どうぞ」

若い男は皿とフォークをテーブルに置くと、テレビを点けた。

「いただきます」

パスタをフォークで巻き取ると、ソーセージを刺して口に含んだ。

「うん、美味しい。いつもながら上手ね」

梓は満足げな顔を若い男に向けた。

ーシャワーを浴びるとベッドに潜った。若い男は背を向けて寝息を立てていた。

「……こんな遠くに連れてきてごめんね。でも、熱海から離れて少しでも遠くに行きたかった。出直すつもりで」

梓は天井を仰いだ。

「……あの日、あなたは友達に会いにあのアパートに行ったのよね。そしたら開いたドアから明かりが漏れてる部屋があつて、覗いたら若い女が下着姿で仰向けに倒れてた。死んでるのかと思ひ、『大丈夫ですか?』って声をかけたら、首を触りながら『ゴボツゴボツ』と変な咳をした後に驚いた顔であなたを見た。女は『誰っ? 警察呼ぶわよ』と言って起き上がろうとした。あなたは強姦目的の不法侵入者だと勘違いされたと思ひ、発作的に首を絞めたのよね。前歴があるから訴えられたら勝ち目がないと思ひ。電車に乗ってからドアノブに指紋が付いてるかもしれないと思ひたけど、指紋を拭きに戻るのは危険だと判断した。誰に見られるか分からない。

あなたから電話をもらってそのことを知った私は、あなたに指示し

た。今のアパートを解約し、家具も処分してウィークリーマンションを借りるようにと。ウィークリーマンションならベッドも冷蔵庫もコンロも付いているから旅行鞆一つで暮らせる。あなたはバイトしながら自活していた。電話は公衆電話からするように言った。私もあなたに電話する時は公衆電話から。そうすればあなたの電話番号も住所も警察に知られることはない。

旅館の仲居になったのも仲居なら着物のユニフォームがあるから衣装にお金がかからない。その分荷物も軽くなるし、いざと言う時に逃げやすい。ウィークリーマンションは一括前払いだから、短期間の契約にすれば家賃を無駄にすることはない。何かあったらいつでも解約できる」

梓は独り言のように喋しゃべっていた。

「あの刑事さん、どうしたかしら。私が失踪したことで何らかの不審を抱いたでしょうけど、今更、捜査のやり直しはしないわよね。だって、逮捕された男が殺害を認めたのだから。……もう寝た？ 私が守ってあげる。だから、心配しないで。このことは二人だけの秘密よ。ねえ、……忠嗣」

完